

自由、1981年2月号

てくる。領土問題のような両国の利害関係が正面から衝突する問題、しかも、その背景に国民感情が横たわっている複雑な問題进行处理するには、両国関係の深い信頼が不可欠の必要条件である。それは相手の立場に立ってみれば、たちどころに理解できることである。沖縄の施政権の返還にせよ、日米関係の二〇年にわたる信頼関係と、そのうえにたつたアメリカの政治判断によってなされたものである。それは日ソ関係についてもまったく同様であり、日ソ間の友好の積み上げ、相互信頼の確立により、ソ連側の政治判断、ソ連国民感情の納得が可能となったとき、初めて領土問題の解決があるだろう。むしろ、この相互信頼の段階がどのような水準で達成されるのか、またこの時、本当に領土問題の解決がありうるのかについては確証はない。しかし、少なくとも信頼関係の確立が領土問題処理のためのよい雰囲気をつくりだすこと、いいかえればソ連政府が、領土問題を解決し日ソ平和条約を締結するための国民の理解をうるための客観情勢をつくりだせることは事実であろう。

日ソ関係を前進させるといふ立場からみれば、今回の円卓会議における最大の成果は、マスコミではさして取り上げなかったが、ソ連側が自から提唱した「ソ日善隣友好条約」案を事実上引つめたことであった。円卓会議の「共同コミニケ」は、

「会議はソ日間の政治、経済、文化などあらゆる分野の交流を拡大するために、ソ日政治関係に安定した基礎を形成することが必要であり、そのために、昨年の第一回ソ日円卓会議の共同コミニケでも採択した、ソ日両国が新たな政治関係の基本原則を確立する、国際社会のなかで一般に認められている「社会体制の異なる諸国間における原則を規定」する文書を作成するための協議

を開始することが重要な課題であることを再確認した。さらに、この原則の確立によって、両国関係を発展させることがソ日平和条約締結のための有効な基礎をつくりだすとの意見の一致をみた。」

とうたっているが、「社会体制の異なる諸国間における原則を規定」する文書とは、ソ連がアメリカ、カナダ、フランスなどと締結している「国家間原則」文書を指していることは明らかである。この文書は、両国間の紛争の国連憲章にもとづく平和的解決や、第三国との間にすでに締結している条約に影響をもたらさない事項が明確に示されている。民間ベースであるとはいえ、ソ連がこの態度を確認したことは、一九七八年の松前重義・日本対文協会長とコスイギン・ソ連首相で示された「日本から提案があれば、ソ連は善隣友好条約の名称や内容にこだわらない」という立場を裏付けると共に、条約の要請ではなく、日本をアメリカ、フランスなど先進諸国と同列化し、しかも第三国との条約に影響させないことを承認した点で、より大きい前進的態度を表明したといえるからである。むしろ、この場合にも、懸案の問題は残されている。しかし、かつての善隣友好条約案にみられた、日本側に拒絶反応を与えた条件は大きく修正されている。これは今後の日ソ交渉にとって重要なポイントであると考えられる。むしろ、第二回日ソ円卓会議の意義は、それにとどまるものではない。なによりも大切なことは、この困難な政治状況のなかで、日ソ間の対話が、日本国民世論を代表する人々によってなされたことにある。毎日新聞の平野裕氏も同紙上でまさしく指摘しているように、円卓精神こそが、今後、日本のあらゆる海外活動に欠くべからざるものであることを示したことである。

「悪役」部会の座長・雑感

トラブルも親善のための礎



石原 萌 記

本誌編集長

開会までのトラブル

こんどの円卓会議（80・11・18～20）で、第一分科会に参加した殆どの人は、わが国にとってソ連という国は無気味な存在だが、現状のような冷却した関係を放置しておくことは好ましくないから、速やかにこの対立を打開するため、相互交流の必要がある、と真剣に考えていた。それだけに私は、この分科会に日本の多彩な世論を代表する自民、社会、公明、民社、新自らの各党代議士。朝日、毎日、読売、共同、NHK、北海道、東京タイムズの各社論説委員、大学教授、文化人が参加した意義を深く感じていたので、座長に推されて以来、国民的合意ともいえる「北方領土」に対するソ連の態度、北方諸島におけるソ連の軍備増強、アフガニスタンへのソ連の軍事介入に関する問題は、いかにソ連側が嫌悪しても、討議をさせ

てはならぬと決意していた。真の友好は双方に潜在する不信の因を率直に表明して話し合ったうえでなければ、確立できないと信じていたからである。そうは言っても、従来の対ソ関係の国内的動向をみていると、箸にも棒にもかからぬ迎合論者もいるので、こうした正論がとるかどうが心配だった。

モスクワ到着早々、案じていたことが出てきた。仲好しクラブが友好のすべてと考えている人々から、「第一分科会の基調報告は、友好のぶちこわし」という非難の声があがったのである。予測されたことであつたから、無視はしたもの、事前に一度の打ち合わせのないまま、明日からの分科会にのぞむ不安もあつたので、総会の終った夕刻、二、三の分科会メンバーと打ち合わせを兼ねて、予定された会場の下見に行つて、驚いた。小学校の狭い教室のような部屋に、三、四人座れる横長の机と椅子が、教壇＝座長席に向つて、ビッシリ並べられていたのである。奥に座つたら最後、会合が終るま

した。しばらくしてから、必ず遅れてもくるから、座ってくれとい
うので「喜び勇んで」座った。

基調報告や質疑内容については、別掲の各論稿が論評しており、
私の意見は重複するので、日本側発言者とその発言テーマだけを次
に記しておく。

基調報告・国際情勢と日ソ関係 白田昭三郎（共同通信・論説委
員）

日米中三国の軍事関係について 中嶋嶺雄（東大教授）

日本の政治動向について 田中豊蔵（朝日新聞・論説委員）

日本における対ソ世論、アフガン問題について 森本良男（読売
新聞・論説委員）

北方領土問題について 太田俊郎（北海道新聞・論説主幹）

日本の軍国主義化について 加藤雅彦（NHK・解説委員）

マスコミの反ソキャンペーンについて 平野裕（毎日新聞・論説
委員）

日ソ円卓会議の意義について 谷畑良三（東京タイムズ・論説主
幹）

日ソ親善の促進について 齊藤実（公明党・代議士）

日本の軍国主義と日本脅威の実態 竹中修一（自民党・代議士）

日本の反ソ脅威論の根拠 渡辺朗（民社党・代議士）

日本のマスコミ批判 上田卓三（社会党・代議士）

ソ連脅威論の現実的根拠 林保夫（民社党・代議士）

決裂しても対話は続けるべきだ 小杉隆（新自・代議士）

それぞれ、事実とデータにもとづいて、ソ連側の日本に対する批

面白いこと、考えさせられたこと

総会で発表された分科会総括は、ソ連側のクリフ・フツォフ博士ほか
二人に、辻氏と私が、話し合って作成した。時間節約のためであろ
う、博士はすでに原案をもっておられた。私は種々の国際、国内会
議で、この種の文案作成に何度か関与してきたので、その表現の一
つ一つが、とんでもない誤解をまねき、トラブルを起してきたこと
を経験している。そこで博士には、お気の毒なほど、原案に「朱」
を入れてもらった。結果は、それだけ折衷で中途半端なものにな
ってしまった、仕方のないことと思っている。

こうした公的スケジュールのなかでの心労は、今では心よい想い
出とともに私の心の糧になっているが、番外の話し合いでも大きな
収穫があった。

一つは、ソ連共産党中央委員会でのサミューチン国際情報部長と
日ソをめぐる国際情勢を語った対話である。この会談で、マスコミ
関係者はそれぞれ一問一答を許されたので、アフガン問題、ポ
ーランド問題を次々に尋ねた。聡明な部長は苦々しい質問でも、公
式的ではあったが、それなりに答えていた。ところが、同席者にと
ってはなんでもない、どちらかといえば、ソ連の政策を好意的に評
したT氏の質問に対して突然、顔色を変えてケンホロロの答弁を
した。ここではその内容にはふれないが、改めて言葉の誤認、国際
認識、国民性、社会体制の相違からくる「相互理解」の難しさを学
んだ。

判発言に激しく論戦を挑んだ。例えは悪いが、ソ連側は統制のと
れた鉄壁のチームで、公式的発言に終始したのに対し、わが日本の
代表たちは、お国よりよろしく、無統制で一城の主が思い思いに自
由に発言した。日ソともに、よくも悪くも百戦錬磨の士の主張であ
る、どうにかして、双方の発言を発展的にかみ合わせようとして
も、無力は如何ともしがたく、すれ違い討論に終始してしまった。
しかし、両国間のコミュニケーション・ギャップが問題視されてい
るときである。日本国民の代表が、ソ連の世界戦略、対日政策を思
うがままに批判して、対ソ脅威の実態を明白にしたのに対し、ソ連
側も対日脅威の因を、率直に主張して応酬したのであるから、それ
なりに成果はあったと思っている。

この会議中に特に私が興味を感じたのは、ソ連側の一糸乱れぬ発
言に対して、日本側発言のなかに自国のマスコミを批判して、ソ連
の「マスコミ悪人説」を裏付けた人がいたことである。問題はその
内容ではなく、こうした自由な発言が許される日本の姿を、ソ連側
のインテリが、どのように受けとめ、考えたかに興味をもったので
あるが、惜しいことに時間がなくその反応を確かめることは出来な
かった。

それともう一つ。他分科会から、もぐり込んで来てまで、ソ連肩
入れの発言をしようとした日本人がいたことである。挙手をされた
が御指名は遠慮した。こうしたことは、やめた方がいい。会議のル
ール違反であるばかりでなく、心ある日ソ双方の人から、迎合論者
として軽蔑されるだけだから……。

二つには、朝鮮半島の問題について、数人の学者、軍人の訪問を
うけ話し合ったことである。個別に深夜あるいは早朝に意見を交換
したなかで、韓国との交流案を具体的に提示されたり、北朝鮮の金
日成政権批判を聞かされた。二、三年前には考えられなかったこと
であるが、これは何度かの訪ソで、「相互信頼」が生まれてきたか
らであろう。

終りにこんどの会議に参加した東京タイムズの谷畑良三主幹が、
「ソ連という国は、なにごとにつけても、過度の被害者意識をも
ち、過剰防衛を正当防衛と思ひこむ伝統と実績のある国」といわれ
ている点。（著書『ソ連共産党政治局』学習研究社）

更には、読売新聞の森本良男論説委員が、「ソ連を悪魔に仕立て
ては相手を見誤る。……相手がつき合いにくい国であれば……相手
にいいだけのことは言い、やりたいだけのことはやったうえ
で、なおけんか別れはしない。したたかさ」を身につければならな
い……（著書『日本にとってのソ連』サイマル出版）といわれて
いることと、朝日新聞の田中豊蔵論説委員が「ニコニコと仲の良い
話だけで、友好の輪は国民的規模で広がるわけではない。まず言い
にくいことを互いに率直に言い合う。そしてその傷を互いにいやす道
を忍耐強く求めていく。そのための『悪役』というものが、第一分科
会出席者の共通した立場であった。」（朝日新聞、80・11・22）とい
われていることなど、今後の対ソ問題を考えるというか、ソ連と交
流していくうえで、重要な示唆になると思った。そうした意味で、
こんどの日ソ円卓会議第一分科会は、一部の人々の非難をこえて、
両国のために大きな役割を果たしたと信じている。